パネリスト
梨田　昌孝氏（NHKプロ野球解説者）
山本　　浩氏（法政大学スポーツ健康学部学部長）
松尾　道彦氏（長崎県遊技業協同組合理事長）
城　　知哲氏（長崎新聞社運動部長）
コーディネーター　村松 真貴子氏（アナウンサー・エッセイスト）

forum

社会貢献フォーラム「スポーツで育む地域と子ども」（全日本社会貢献団体機構、長崎新聞社、全国地方新聞社連合会主催）が11月17日、長崎市の長崎新聞文化ホール・アストピアで開かれた。NHKプロ野球解説者の梨田昌孝さんの講演と専門家によるパネルディスカッションがあり、スポーツを通じた社会貢献の役割や可能性について考えた。市民ら250人が熱心に聞き入った。

互いを尊重 つながり深める

スポーツで育む地域と子ども

長崎で社会貢献フォーラム

村松　スポーツを通して子どもたちの心と体を育み、地域づくりをするためにはどうしたらいいか。

山本　今スポーツの世界で「コーディネーショントレーニング」が盛んに行われている。遊びが変わって運動経験の少なさなどから、基礎的な運動が身に着いていない子どもが増えた。そのために自分の体の外や中の刺激や情報を分析して、「瞬時に行動に反映させるトレーニング。神経系回路や運動器官の活性化に効果がある。

スポーツは楽しい、面白い。そのことが中心にあって周りに教育や指導というものが付いてくる。行動の結果として常に起こる嫌なことがとまるのが「負の強化」。例えば叱るということをベースにすると管理された感情が残るし、「ねばならない」という限定された強迫観念が心の中に残る。その逆で喜んでくれるような環境をつくるのが「正の強化」。褒めると自由意思が働く。これにはさまざまな可能性があって満足感にもつながりやすい。

昭和7年に出版されたカール・ラングレン著の「BASABALL」。プレーする心構えとして「すべてのプレーヤーにとって基本的に重要な事柄は、和やかな気分でプレーすること」とある。そのためには「自分から進んでそのような気持ちを持つよう教える」「駆り立てたり叱り飛ばしたりせず、励ますようなやり方で心安く導く」。まさに先ほどのファイターズ、梨田さんの指導方針と重なる。

アメリカではスポーツをする理由に「目標設定の方法を学ぶ」「タイムマネージメントスキルを伸ばす」などが挙がる。スポーツのなすべき力、発揮してくれる能力を考えた時、このような説得の仕方も考えてみる時代に来ているのではないかと思う。

村松　長崎県ではスポーツを通じてどのような社会貢献が行われているか教えてほしい。

城　長崎新聞社が主催している「県少年ソフトボール選手権大会」。30年以上続いている大会で毎年約90チームの参加がある。「郡市対抗県下一周駅伝」は60年以上も続いていて3日間で400㌔、小学生からシニアまで地域のたすきを懸命につなぐ大会。どちらも多くのボランティアに支えられて成り立っている。特に駅伝は地域の住民や企業など2000人以上が運営や協力に携わっている。

長崎新聞の紙面でも1日に付き2～3㌻を割いて報道している。全選手を掲載することはできないが、毎回喜びの声が届く。また数年前に新設した小学生区間が好評で、応援にすごい数の人が集まる。子どもたちの未来のために今後も続けていきたい。

山本　浩氏

松尾　道彦氏

城　知哲氏

楽しさや魅力伝えたい ― 梨田
教育や指導法に工夫を ― 山本
情報取り入れ積極支援 ― 松尾
審判の意識と質高めて ― 城

村松　この中から走る喜び、応援してもらう喜びを知ってオリンピックを目指す選手が出るかもしれない。

城　それが私たちの願い。毎回たくさんの人がいろんな所で応援をしてくれる。これが選手の、ボランティアの力になっている。また、審判の意識・質を上げること、観戦のマナーを守ることもこれからのスポーツ界の未来を支える大事な要素だと考える。

梨田　選手の努力、ファンの支え、審判への感謝などお互いが尊重し合うとすごく良い形になっていくと思う。

村松　地域に密着した社会貢献活動の事例は。

松尾　長崎県遊技業協同組合では、街づくり運動、青少年健全育成運動、スポーツ・文化活動などさまざまな社会貢献活動に取り組んでいる。「大村親善少年野球大会」や「わんぱく相撲五島場所」などを支援。来年の「がんばらんば国体・がんばらんば大会」への寄付も行い、県知事から感謝状をいただいた。

青年部主催で「チャリティーゴルフコンペ」を毎年開催。募金を集め、児童養護施設へ寄贈している。また、県内授産施設への作業委託を実施。金品の寄付だけでなく、仕事を提供してそれに対する報酬という形での支援を続けている。このほかにも地域の清掃活動やイノシシ被害防止などへの支援も行っている。地域の社会貢献なくして業界の発展は望めないという理念のもと、今後も活動していきたい。

山本　スポーツを見たり応援したりする際に大切なのは、選手やチームが自分と同じなのかということ。自分に関わりのある人、つながっている人が出ているかどうか。

村松　地域とのつながりを思い起こして郷土愛に燃える、古里に思いをはせる機会にもなる。

城　長崎県出身者がどこでどんな活動をしているか。私たちにとって一番の活力になるし、勇気を与えてくれる。金メダルを取った内村航平選手の活躍は子どもたちの勇気・希望になっている。来年の国体に向けて長崎県は全競技強化中で、今年の国体では天皇杯10位という成績を残した。もちろん地元国体は優勝を目指しているので注目していただきたい。

村松　国体がもたらす効果は大きい。

城　諫早の競技場は今年度から供用が始まったが、これがなかったらV・ファーレン長崎がJ2昇格することもなかった。これも国体効果の一つ。

村松 真貴子氏

山本　スポーツはテレビで見るのと直接足を運ぶのでは楽しみ方が全然違う。じかに行くと特定の選手を最初から最後まで見ることができる。

村松　スポーツを通じて社会貢献をする。明日からでも今からでもできるというスタンスでひと言。

城　きちんとしたマナーで応援する。声援を送る。ひいきのチームが負けても相手チームに対して称賛の拍手を送る。これも今すぐできる社会貢献だと思う。そして地域のスポーツを育てていく。どんなに小さな大会でも極力掲載して、子どもたちが頑張っている姿を紙面上で応援していきたい。

松尾　もっとスポーツに関わる活動を増やしていければと思う。いろんな情報を今以上に取り入れて、スポーツや身障者支援など積極的に取り組んでいきたい。

山本　社会貢献することの大きな目的は子どもたちが対象。子どもたちにスポーツの魅力をきちんと伝えて感じてもらわないといけない。スポーツの魅力は何と言っても楽しいこと。そして世界や社会を知ることにもつながる。

梨田　子どもたちに勝ち負けだけでないスポーツの楽しさ、チームワークの良さをしっかり伝えていきたい。人を育み、地域の力を付けていくためにも、来年の国体成功へ県民が一致団結して頑張ってほしい。

講演
梨田流コミュニケーション術
梨田　昌孝氏

発想の転換で全力投球

2008年、球団合併で行き場所がなかった私を北海道日本ハムファイターズが監督として迎え入れてくれた。北海道には身寄りも知り合いも全くいなかったが、北海道に行って今までの自分の思いが大きく変わった。

大阪近鉄バファローズの監督をしていたころは、ちょっと負け続けたりすると「やめてしまえ」「やる気あるのか」ときついヤジを飛ばされた。一方、北海道の人は、いつも温かく選手に拍手を送ってくれる。これが人を育てる、選手を育てる一つの基本だと思う。そういった中で、私はファンに助けてもらった。そんなファンの方々にどうお返しをするか。勝って、優勝して、恩返しをする。そう強く思った。

ファイターズの監督として学んだことは、常に地域密着、ファンサービスファーストということである。選手だけでなく球団全体で地域と接している。監督、選手たちは病院へ慰問に行く。子どもたちはもちろん、看病しているお父さん、お母さん、看護師さんたちを激励する。小学校への訪問もする。

いつも全力、最後まで諦めない。ファイターズの選手たちは、打ったら必ず一塁まで全力で走る。これは契約更改で選手に球団が伝えるし、監督、コーチも常に意識している。プレーの失敗などは仕方ないが、走ることに関してはみんなができる。だからファンの方も走らない選手に対して文句を言う。そのうちに選手たちが先輩に対しても言うようになる。みんなで何かやろうとするときにすごく集中する。こういったことがチームを支えてくれていると感じる。

さまざまな地域密着活動のお返しとして、ファンの方たちは温かく応援してくれ、たまには檄（げき）を飛ばしてくれたりするのではないか。監督としても、温かく背中を押されていると「何か良い知恵を働かそう。もっと良いことはないか」と常にそう感じさせてくれる北海道だった。

やっぱり人の良さが大事。見返りを求めず、個人が一番ではなくチーム全体が一番ということも必要だと思う。

監督をしていて、特に稲葉篤紀選手、北川博敏選手との出会いがありがたかった。稲葉選手は、自分のことよりも、まずチームが点を取るというチームの精神が非常に素晴らしかった。北川選手はとにかく野球が大好き。人のプレー、若い選手やライバルであっても、いいプレーやいいバッティングをするとすごく喜んで「ナイスプレー」「ナイスバッティング」と声を掛ける。人のことを自分のことのように喜べるのは本当に尊い。

それから常にプラス思考ということを考えてほしい。自分が苦しい時こそ明るく。窮地に陥った時にいかに機転を利かせるか。

ある時、野村克也監督と一緒に囲み取材を受けていた。和やかに進んでいたが突然、野村監督が私に「うちの古田敦也、俺じゃなくておまえを尊敬しとるらしいぞ」と言った。その場が凍り付くようで、すごく暗い雰囲気になってしまった。瞬時に「野村監督の背番号は19番、僕は8番。足すと27。古田は27番を付けています。野村監督の方を3分の2尊敬していますよ」と言ったら野村監督が笑った。するとその場もふわっと明るくなった。そうして野村監督と私がものすごく近い関係になった。

厳しい状況でも、いつも全力を尽くして諦めない。そして常にお互いのことを考えて動くと、自分にとっても周りにとってもいい環境が自然と築けていくのではないかと思う。

AJOSC

全日本社会貢献団体機構は、全国のパチンコ・パチスロホール組合の連合会組織である全日本遊技事業協同組合連合会（全日遊連）を母体として 2005 年 12 月に設立された任意団体で、学識経験者、文化人、政財界関係者が参加し、平和で住みよい社会づくりに貢献する事業への助成や社会貢献活動の顕彰を主な活動としています。

私たちは、社会に役立ち必要とされる研究や事業、活動をサポート・応援しています。

助成事業

今日の社会に最も必要とされる研究や活動に対する助成事業は、当機構の根幹事業です。毎年、子どもの健全育成、命を大切にする研究や活動、学術・文化の振興に関する活動に対し、助成を行っています。

◆平成 24 年度助成事業（実績の一例）

「『ぱんぷきんネット』つなげよう！ひろげよう！こどもたちの笑顔のリレー」事業 －ぱん・ぱん・ぱんぷきん－

「JR 東京駅に雄勝石絵壁画を飾る～震災被災児たちの挑戦～」事業 －石絵教室実行委員会－

「認知症患者とその家族のためのアート鑑賞プログラム」事業 －一般社団法人　Arts Alive－

顕彰事業

会員の社会貢献活動を顕彰し、今後一層の活動を期待して、年間で最も優れた社会貢献活動に「社会貢献大賞」を授与することとし、平成 17 年から実施しております。

第６回　社会貢献大賞
「ユニバーサル社会実現に向けた社会貢献」事業
兵庫県遊技業協同組合

第７回　社会貢献大賞
「石巻湊地区ボランティア隊派遣」事業
東京都遊技業協同組合

第８回　社会貢献大賞
「社会的弱者への思いやり特別支援年・5 年」事業
神奈川県遊技場協同組合

全日本社会貢献団体機構　TEL.03-5227-1047 http://www.ajosc.org